

## 医療ルネサンス No.4874

## あきらめない認知症 ①

5



元気に海外旅行も楽しむ豊岡千枝子さん(左)と昇さん(6月、成田空港で)

## 余分な髄液排出 症状改善

の通り道から腹腔内へ細い管を留置し、余分な髄液が流れ出るようにする。ただしこの治療で髄液が減り過ぎると、脳内の圧力が低下して脳に血腫(血の塊)ができる危険性がある。このため、手術を受けた後は定期的に受診し、髄液が適度に排出されるよう調節する。

神奈川県横浜須賀町の豊岡千枝子さん(79)に物忘れが始まったのは2006年ごろ。直前の会話や、眼鏡や通帳の置き場所を覚えていない。年賀状のあて名を書き忘れてしまう。「認知症かも」。同居している息子、昇さん(52)に連れられ、近くの病院の物忘れ外来を受診したが、はっきりとした診断はつかなかった。そうしているうちに症状は進み、主治医の紹介で08年5月、横須賀北部共済病院の桑名信匡院長(現

東京共済病院院長)を訪ねた。千枝子さんには物忘れに加え、歩幅が狭まり小刻みにしか歩けない症状があった。さらに脳の磁気共鳴画像(MRI)検査では、脳に水がたまっている様子がみられた。これらの症状や検査結果などから、桑名さんは「特発性正常圧水頭症ではないか」と疑った。

原因不明で、脳や脊髄の周囲を満たす髄液(脳脊髄液)の流れが悪くなり、脳内に大量にたまる病気だ。脳が圧迫されて、身体機能に異常を引き起こす。患者の多くは60歳以上で、歩行障害が表れた後に、物忘れや尿失禁の症状が出ることが多い。物忘れの程度は比較的軽いのが特徴だ。ただし一般的な認知症との区別が難しく、専門的な検査や診断が必要だ。千枝さんは腰から針を刺し、髄液を少しだけ抜く検査をしたところ、一時的に改善した。そこで09年5月、本格的な治療として「髄液シャント術」の手術を受けた。脊髄を取り巻く髄液

手術を受けた千枝さんは、以前に比べ苦勞なく歩けるようになり、物忘れも減った。編み物や庭いじりもするようになった。昇さんと趣味の海外旅行にも2回出かけた。寝たきりで髄液の流れが悪くならないよう、いすに腰掛けたり散歩をしたりする生活を心がけている。認知症とされる高齢者の5~10%が、実は特発性正常圧水頭症だという推計もある。桑名さんは「何年も寝たきりだった人が手術で元気になった例もある。歩行障害に物忘れが重なる場合などはこの病気の可能性があり、脳外科や神経内科を受診してほしい」と話す。